学 位 論 文 要 旨

氏 名 島田 郁子

題 目 近森一重の音楽教育理論の研究
－音楽教育における「実践の論」の構築と深化を中心に－

音楽の授業が子どもの学ぶ意欲によって推進される授業になるためにどうすればよいか。筆者は、常に反省的に捉えていたこの問題意識をもって研究を始めた。そして、近森一重の音楽科単元学習に興味を持つに至った。近森の著書の一つ『音楽カリキュラム 単元学習の計画と実際』は、これまでの先行研究において音楽の単元学習の衰退を語るものとして扱われることが多く、また近森自身も、音楽科における経験主義に基づいた単元学習を構成することが困難であることを指摘していた。一方で近森が、戦後の三つの学習指導要領（試案）の作成に関わっていたことを知った。近森の業績について言及した研究はこれまでいくつか存在していたが、近森という人物、特に近森がどのような音楽教育観を形成し、具体的にどのような音楽教育実践や音楽教育に係る仕事をしたか、ということについて詳細に研究した先行研究は非常に少ない。

そこで本研究では、まず近森一重という人物を対象にして、近森の音楽教育観を築ききっかけとなった、唱歌訓導としての実践に注目し、戦前の近森の歩みについて調査・検討を行う。次に、近森の戦前の実践や著作物を踏まえ、戦後黎明期に文部省事務官として学校音楽教育界発展のために尽くした業績と、5冊の音楽教育書によって啓発しようとした、近森が描く学校音楽教育のあり方、すなわち近森の音楽教育観について、戦前と戦後の連続した部分と深化した部分とに注目しながら考察を加える。その上で近森の音楽教育理論が現代の学校音楽教育に示唆するものを得ようとするのが本研究の目的である。

本論文は全部で3部8章構成を取る。第1部では実践者としての近森を、第2部では行政官となってからの近森について明らかにする。第3部はそれまでの論述を受けて筆者が音楽科の学習指導案を作成し、授業実践をする。この実践について、近森の音楽教育理論に則して考察し、今後の音楽教育実践について示唆を得る。

序論では研究の目的と意義、先行研究の検討、そして研究の方法について述べる。その中で、上記に示した3部構成で論を進める上で、筆者は近森の生涯を以下の通り五つの時期に区分して論を進めることが適切であると考えた。以下五つの時期の概略と本論文で述べた箇所を示す。

第Ⅰ期は、学生としての学びを終えるまでの期間、すなわち近森の誕生から第四臨時教員養成所学生時代とした。第四臨時教員養成所での青柳善吾との出会いは、学習者を中心とした近森の音楽教育の原点となった。第1部第1章で述べる。

第Ⅱ期は、唱歌訓導として東京市汐見尋常高等小学校で実践を深めた時期とした。汐見尋常高等小学校校長の川井立は「注入教授」にも「無節制学習」にも陥らない「自律的学習態度の建設」を教育方針とし、近森に与えた影響は大きい。近森は、授業や唱歌演習会を初め

とする校内外での実践を積み重ねる一方で、日本教育音楽協会役員として、行事や講習会等の運営と唱歌集等編纂の活動によって人脈を広げていった。本論文第1部第2章と第3章において上記活動内容を詳述し、第4章では、近森の論文や著書をもとに、戦前に形成された近森の音楽教育観について考察する。

第Ⅲ期は、近森が視学官として、また文部省職員として、戦中・戦後の混乱期の音楽行政に携わった時期である。近森は、暫定教科書やその後の新しい教科書の編纂に携わっており、『昭和22年度 学習指導要領 音楽編（試案）』の作成にもかなり深く関わっている。第2部第5章で述べる。

第Ⅳ期は、文部事務官として『昭和26年度 改訂版中学校高等学校学習指導要領 音楽科編（試案）』『昭和26年度 改訂版小学校学習指導要領 音楽科編（試案）』を作成し、文部省を退官するまでの期間である。近森はCIE（民間情報教育局）と幾度も会議を重ねて二つの学習指導要領を中心となって作成していった。また、混乱した戦後の学校音楽教育環境を整えるために力を尽くした。その一方で、アメリカの書籍を中心に学びを進め、新しい教育の在り方を吸収し多くの著書、著述を手がけた。この第Ⅳ期は、近森が行政官としても音楽教育者としても活躍した時代といえる。この期は第2部第6章で扱い、第Ⅲ期及び第Ⅳ期で形成された、戦後の近森の音楽教育観を第7章で論述する。

第Ⅴ期は、その後の期間で、文部省退官後から1976（昭和51）年6月21日に逝去するまでである。第Ⅴ期については今後の課題とし、第7章附節における記述にのみ留める。

以上の研究から、近森の戦前の音楽教育観が、三つの「軸」と一つの観点を有した「実践の論」として形成されていたこと、それが戦後アメリカの教育を咀嚼して取り入れることによって、深化していったことを明らかにした。

そして、第3部第8章では、近森の音楽教育理論をふまえた学習指導案を作成して実践し、その実践を近森の論に則して考察する。そして、近森の「実践の論」が現代の音楽授業においても有効であるという確信を得た。

以上の論述を踏まえ、結論において近森の音楽教育理論が、現代の学校音楽教育にどんな示唆を与えているのかについて述べ、本論文を終える。